

発行日 平成28年9月12日
 発行 那珂市
 編集 秘書広報課広報グループ
 〒311-0192
 茨城県那珂市福田1819-5
 E-mail hisho-k@city.naka.lg.jp
 URL http://www.city.naka.lg.jp

ななか

目次 Contents

日ごろから災害に備えましょう	… 2
水鳥④	… 4
マル福制度について	… 8
子育て支援センターつぼみ	… 10
菅谷まつり	… 12
人事行政運営などの状況を公表します	… 14
那珂ふるさと大使通信	… 15
那珂市内放射線量測定状況	… 19
まちの話題	… 22
Information	… 24
さわやかさん ほか	… 28

写真：菅谷まつりにて

いい
 ななか
 那珂
 暮らし

水鳥

24

那珂市の教育遺産群（前編）

「私塾と寺子屋」

私塾と寺子屋

平成27年（2015）4月23日、水戸の教育遺産群でもある弘道館・偕楽園および成沢の日新塾などが、栃木県の足利学校、岡山県の閑谷学校、大分県日田市の成誼園とともに日本遺産に登録されました。中でも足利学校は、鎌倉時代・室町時代の最高学府といわれますが、那珂市にも下大賀の弘願寺に文明10年（1478）に出版された「金剛般若波羅蜜經」の版木が存在します。そのころの出版業は鎌倉が中心となっていました。こ

▼弘願寺所蔵の金剛般若波羅蜜經版木



こ常陸国の瓜連においても印刷出版の事業が行われていたことを示す貴重な資料です。これらを考えると、中世におけるこの地域の学術文化の高さを知ることができます。

ここでは、近世・近代における那珂市の教育遺産群として、医学を含む文武両面にわたる主な私塾と寺子屋およびそれらを担ったひとびとを紹介します。
（写真「寿蔵碑」「墓碑」は当該記事人物のものです）

藩校と郷校

江戸時代から明治初期にかけての農村での教育は、僧侶や神官・修験などが師匠となつて読み・書き・そろばんを教えました。これが寺子屋教育であり、教え子は寺子と呼ばれました。戦国時代末期に、寺院で武士や町家の子弟を教育したことに源流があるので、後には寺院以外の塾も寺子屋といいました。主な教科書は「庭訓往来」「実語教」「女今川」「書簡文」などで、それらの素読、暗記、書写を中心とする初歩的な教育でした。また「論語」「孟子」「孝経」などの儒学を中心とする道徳的なものもありました。寺子は村内でも役付きの子息か学問好きの子どもであり、7歳くらいから入門しました。塾は寺子屋より一歩進んだ内容の教育で、地理や歴史・医学など専門性もあつたと考えられます。市内の指導者も塾か寺子屋かは明確には区別できませんので、地域ごとに紹介します。

江戸幕府を担った幕臣たち子弟の教育は、上野の「昌平坂学問所」（後に昌平黌）で行われました。諸藩では、藩校を建立して子弟の教育がなされました。しかし、水戸藩の藩校は9代藩主斉昭の時代、天保12年（1841）の「弘道館」建設まで待たなければなりませんでした。『大日本史』の編さんをはじめ文教政策に熱心であった2代藩主光圀は、藩校の建設には及びませんでした。それは、編さん事業の推進が大きな理由であつたと思われます。しかし、教育は編さん事業の拠点であつた「史館（彰考館）」での「史館講釈」や太田御殿での「馬場講釈」などが行われていました。加えて編さんを行う学者たちも、森儼塾などのように水戸城下に私塾を開いていました。中期からは、城下の八幡小路（田見小路）に朱舜水を祀る舜水堂が建てられて「舜水堂講釈」も行われました。

▼復元された暇修館

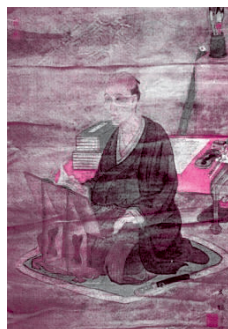


まりです。その後は、同4年（1807）に潮来の「延方学校」が設けられ、そのおよそ30年後には、湊（ひたちなか市）に「敬業館」が開かれ、さらに太田に「益習館」、大久保（日立市）に「興芸館」（後に「暇修館」と改称）、野口（常陸大宮市）に「時雍館」と次々と郷校が建設され、周辺村々の庄屋・組頭およびその子弟たちが勉学に通いました。

そのほかには、村々の庄屋・組頭や僧侶・修験・神官たちが寺子屋・家塾を開いて近隣の子弟の指導に当たつていったのでした。

私塾・寺子屋の指導者

○原好誼軒邦明



▲鈴木梅岡画
「原好誼軒」
提供：原公史氏

号は好誼、額田村の人。安永4年（1775）白羽村（常陸太田市）の渡辺家に誕生し、19歳のときに額田で家伝の卯葉の製造販売もしていた原重光に請われて養子となりました。地理学者長久保赤水の門人であった太田の立川淳美に師事して学問修業に努め、真率会を組織して「孝経」「論語」を講義し、人としての道徳や婦人の道を指導しました。また、お茶や汁物だけの質素で純粹に学問に励む講座「汁講」を行い、質素儉約を奨励しました。「占春亭」と名付けた書斎には近郷からの子弟が集い、その数は100人を超えました。好誼軒の晩年、嘉永5年（1852）に門人たちが相談して原家の菩提寺である引接寺内に寿藏碑（生前に本人の生涯を記して建てるもの）を建立しています。

好誼軒は貴重な「占春亭日記」などを残していますが、「豊後の国二孝女

物語」にも関係しています。遠く豊後（大分県）から親鸞聖人の遺跡を訪ねてやってきた父親が、病に倒れて青蓮寺（常陸太田市）で世話になっていることを知った二人の姉妹が、さまざまな苦難を経ながら迎えにやってきました。この親子が帰郷するに当たって、大勢の村人が見送りますが、好誼軒も、かつて水戸藩主も愛でたことのある自宅庭の栗の実を、孝養の供えにもと贈りました。栗は苦離・旧里（久里）を意味するものであり、さらに「遠く父を旧里に伴い、神仏の助けによつて離苦得楽の時もあるであろう。父子ともに彼の国に帰って孝道を尽くせることを期待します。」と記した上で、『東まで薫りこぼして豊後梅』と詠んで贈っています。



○海後山城

諱は宗邦、三島神社の神官海後大和宗辰の子です。幼少より読書を好み、長じて父の後を継ぎました。文政・天保時代には好学の理由により、藩から褒賞を得ています。いつから子弟教育に入ったかは明らかではありませんが、門人は地元本米崎の者が大多数で、墓碑には50数人の名が見えます。桜田門外の変に参加した海後礎磯之介宗親は、その4男です。



▲三島神社

○根本藤兵衛照郷

額田村の人。幼少から学を好み名声は近隣に聞こえていました。庄屋職を辞し、江戸に出て紀州藩士の榊原元軌に師事しました。帰郷後は、詩歌を中心にさらに指導に専念しました。四方から雅客墨人が来訪し、教えを受けています。明治9年（1876）、藤兵衛73歳の時、門人たちが300人が鱗勝院境内に謝恩の念をもつて寿藏碑「照郷根本先生墓」を建立しました。



○山田京山

天保14年（1843）9月西木倉村に生まれ、諱は義質、通称は強介。長らく水戸藩士矢口氏に就いて和漢の学を修め、後に家塾を開きました。書画や詩歌をよくし、ことに俳句では名吟口を衝いて出で、常に同行の点者となりました。問われれば詩を詠み、胸襟を披瀝して吟唱飽くことを知らなかったといわれます。それにより、師匠の遅月より宗匠の資格を得たこともあって、明治31年（1898）に雪華庵京山と号してますますその道に邁進し、その門人は500余人にのぼったといわれます。大正5年（1916）に73歳で歿しました。門人一同は相談し「報恩、山田京山先生之碑」を西木倉原ノ内の山田家先塋の地に建立しています。



○奈治原如清・民部父子

鴻巣村鷲神社に隣接する宝幢院の修験であつた如清は、寛政期(1789~1800)に塾を開き、門人は鴻巣村の115人、飯田村の55人、戸崎村の15人、門部村の12人、中岡村の11人などを含む235人をはじめ、近郷の上坪村(城里町)や野口・下岩瀬・岩崎(常陸大宮市)、上国井(水戸市)などの各村を含めて400人超といわれました。そのうち、女子は鴻巣村が6人、飯田村でも4人いました。盛りのころは、集う門人は日に数十人の賑わいであつたといわれます。天保5年(1834)80歳で歿しました。

主な門人には中岡村鹿島で寺子屋を開いた海野英彦、額田村鈴木市十郎の子孫世美(梅岡)、菅谷村庄屋で山横目の横須賀勘兵衛、飯田村庄屋大和田源衛門、鴻巣村で私塾を開いた大内仁寿、戸崎村庄屋綿引清三郎、上坪村神官今瀬織部などがいます。

一方、民部(字は斐雄)は馬頭村の修験に生まれ、如清の養子となつて文政3年(1820)22歳で後を継

ぎ、天保15年(1844)に飯田村と戸崎村の鎮守の神官となりました。その間、鴻巣56人、飯田50人、戸崎27人、門部7人・南酒出2人など142人を含め、近郷近在からの門弟は265人を数えました。このうち、女子は鴻巣村で1人、飯田村で3人いました。門人の中には飯田村庄屋大和田源衛門・貞蔵父子、兼帯庄屋青山四郎、修験・神官となつた小田倉祐貞、無比流杖術・為我流柔術指南富田兵左衛門、飯田村長となる大和田兵四郎、芳野小学校初代校長となる大和田貞勝、芳野村初代村長となる宮本逸平らがいます。明治3年(1870)、72歳で歿しました(墓は整理撤去されています)。



○藤田安崇

安崇は文化5年(1808)3月に生まれた古徳村の神官(祝)で、文久元年(1861)に54歳で歿しました。古徳と静の村境近くに藤田屋敷と称する一郭があります。この寺子屋で教を受けた者には、静村の黒沢忠治・黒沢久米八や門部村の金沢孫兵衛のほか、小場村(常陸大宮市)の安藤東之進や盛金村(大子町)の上久保源次兵衛、西金村(大子町)の河井孝四郎、八田村(常陸大宮市)の鈴木才介などがおり、墓碑の白石には周辺の村々からの門人84人の名が刻まれています。碑は、文久元年(1861)11月に建立されました。



○大内常衛門仁寿

周防(山口県)を祖先の地とする大内氏の子孫で、鴻巣村根城内に生まれしました。初名は重兵衛、諱は仁寿、字を子徳・鴻峯とし、鷲山と号しました。幼少より学を好み、宝幢院の修験奈治原如清に師事し、さらに文政6年(1823)4月から文政10年5月まで儒学を中心に研究を深め、天保期(1830~1844)から私塾を開設して子弟教育に努めました。碑文には、「先生、神儒を尊び、常に賓客を喜び、暇あるごとに読書す。月の夕べ、花の晨に詩を吟じ、邸宅その美を好まず」と称えられています。明治の学制公布に当たっては、私学開業を願い出で、明治6年(1873)7月に官許を得て私塾を開校し、それに時習舎あるいは鴻学舎と名づけました。「鷲山大内先生之墓」の碑は、鴻巣の木戸共同墓地内にあります。



○小田倉祐貞

飯田村に生まれ、三極院を称しました。諱は祐貞、字は秀勢、号は椿庵です。元は大和田氏で水戸藩附家老中山氏に仕え、その後修験であつた小田倉姓を継いでいます。また、藩主斉昭の追鳥狩など軍事訓練では遊撃隊員として活躍しました。明治元年(1868)の戊辰戦争の最中、水戸藩内はまだ天狗・諸生の抗争が続いており、祐貞は諸生派に属して一時会津藩兵とともに官軍と戦いながら出羽・越後方面を迷走、8年の歳月を送り帰郷しました。その後、家塾「三極院」を開いて周辺のひとびとの指導に当たる一方、衛生委員や村会議長を務め、明治26年(1893)2月9日に70歳で歿しました。「椿庵翁之墓」は明治28年の建立、撰文は元水戸藩士で文化大学教授も努めた内藤耻叟です。



○海野家三代(英彦・照睿・瑞彦)

海野家の祖先は信州(長野県)の滋野氏で、鹿島字堂山吉祥院の修験です。院の境内には東征神社が建っています。英彦(号は松雪)は、奈治原如清の門人で天保12年(1841)に病歿しました。門人は地元では中里の35人を筆頭に、門部26人、磯崎22人、中岡・戸崎12人、また太田、助川、宇留野の各村など広範囲にわたっています。異色の門人では、助川城主山野辺氏の家臣小川弥七がいます。

照睿は英彦の長子で椿齋と号し、詩歌・俳諧をよくし、算術にも通じました。その一方で医術にも通じ、しばしば村人を病から救ったといわれます。門人には戸崎村庄屋綿引左衛門や南酒出村組頭稲田宗七ら200余人に上ると云われます。

瑞彦は照睿の長子で天保3年(1832)に生まれ、東潮と号しました。幼少より祖父英彦の薫陶を受け、学問・書に造詣が深く、明治期に入って谷河原(常陸太田市)・地元鹿島神社の神官を務めました。寺子屋教育に従事すること60余年、諄々として熱心に教えたといえられています。学制発布後は、境内に創設された門部村鹿島村合併の朋来小学校で教鞭を執っています。門人の範囲は鹿島・門部・中里・瓜連・飯田・戸崎・古徳・鴻巣・静などの各村に及び、主な門人には、木崎村長となった中崎聚・小泉三次郎、瓜連村長となる清水初太郎らがいます。大正5年(1916)、85歳で歿しました。墓碑は、大正6年に建立され、常福寺住職安西覚順の撰文です。



○中井川量之介

文政元年(1818)生まれの門部村の農民で、耕吟と号しました。幼少より読書を好み、良く父母に仕えました。はじめ吉祥院修験海野英彦の門人となりますが、家事にも大いに励み、外出に当たっては必ず書を携えたという勉強家でした。また、水戸の学者青山延光・藤田東湖に師事して学問を修め、和歌・俳諧(俳号は「米花」)をもよくしました。藩主斉昭が幕府から処罰を受けた際には、和歌を献上して憂国の意を述べ、斉昭の感賞を得ています。門人の数はおよそ200余人、明治期に入り朋来小学校で教鞭を執りました。「耕吟中井川翁碑」の撰文は水戸藩学者であった津田信存、明治20年(1887)に門人らが建立したもので、門部坪の共同墓地内にあります。



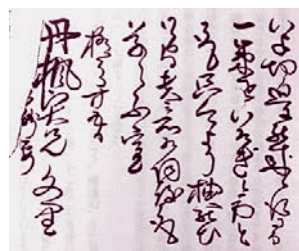
○齋藤監物、徳親・徳寛、務



▲齋藤家墓所

静神社の神官齋藤家は、幕末から昭和初期にかけて寺子屋教育に尽力しています。監物の子である徳親・徳寛兄弟および徳親の子の務と三代にわたっている人たちです。監物の剣は神道無念流、書は藤田東湖流であり、監物の弟、齋藤式部も東湖流でした。監物は、加倉井砂山や藤田東湖に学び、大宮郷校、野口郷校でも教授しています。

監物は、万延元年(1860)3月3日の桜田門外の変に参画するなど国事に奔走していましたので、門弟の指導も容易ではなかったと思われます。監物の歿後は式部が漢字の指導をし、明治20年(1887)ごろからは徳親兄弟および徳親の子務が周辺地方の青少年育成に貢献しました。



▲高橋多一郎宛監物書状
秋山義隆著
『古文書に親しむ』より

○安西覚順



慶応2年(1866)4月、菅田村(常陸太田市)に生まれました。常福寺71世の住職となり、布教部長などを務めて常に宗教の振興に尽力しました。農閑期には寺の入口脇(右写真)に寺子屋「耕餘学舎」を設け、儒学・歴史・唐詩選などを教授しました。門人らは、瓜連、静、下大賀、門部はもちろん村田、石沢、岩瀬などの各村から30〜40人が集まり教えを受けました。大正10年(1921)1月、55歳で歿しました。覚順に、寺子屋の様子を詠んだ次のような漢詩「耕餘学舎経営」があります。

蕭條として寒林草廬を囲む
風塵已外幽居を楽しむ
南軒日暖かにして梅薫る処
閑に村童を伴って古書を読む